埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）	文化構造研究専攻（哲学）		学籍番号	06CS010
氏名	齋藤　俊介	ローマ字	SAITO SHUNSUKE	国籍（留学生）

修士学位論文名特定課題研究名	芸術作品の意味作用について		
提出年月日	2007 年 1 月 10 日	指導教員	高橋　克也
体裁（　論文　）	39 頁（1 頁文字数 1440 字）	言語	日本語
別冊添付資料等			
キーワード	芸術　記号論　実存　グッドマン　ヤコブソン　バシュラール		

記号論を援用して芸術作品固有の意味作用の解明を図る。

芸術に特殊な地位を与えようという傾向は古来より実在するが、しかしその特殊さがどこにあるのかについては未だ定まった見解には達していない。芸術は歴史的文脈や、それぞれの時代の主たる思想によっていろいろに解釈されつづけてきたからである。本論文では、記号論の助けを借りながら、芸術作品を他の言語記号などと同列の一個の記号として扱い、芸術作品それ自体の構造のうちに芸術作品の特殊さの理由を探る。

また、芸術作品とわれわれ人の生との関わりにも焦点を当てる。芸術作品の特異さはおそらくそれ自身の記号のあり方のうちにあるが、そのようなあり方が何故文化の中でとりわけ高い地位を与えられてきたかに関しては、人の生とその意味づけという文脈を抜きにしては語ることができないからである。

まずは、芸術作品が人にもたらすのは単なる感覚的満足である、という見解を論駁せなばならない。ここでいう感覚的満足とは、特定の刺激に単に「受容する」ことによって得られる快のことである。例えば、甘いものが多くの人の舌を喜ばすように。芸術はこのような単に受動的に経験されるだけの享楽ではなく、人はそれに対しより積極的主体的に関わってゆくのだ、というのが本論文での態度である。そこにあるのは、単なる感覚ではなく、より知的な態度と、喜びである。アリストテレスの言葉にあるように、「人は生まれながらにして知ることを欲する」。しかし、この言葉を、どのような知であれそれを知ることは人にとって喜びとなるだろう、という意味に解してはなるまい。自動車の設計図と絵画との違いはどこにあるのか。前者には確かに知が含まれている。後者にも、おそらくある種の知が含まれている（それがどのような知でありうるかは本論で検討する）。しかしこのことをもって両者を同じものと見なすわけにはいかない。知のあり方は多様である。われわれの生においてその知がどのような働きをするかは多様である。知を示すという共通の特性を持つ（であろう）これら二つの対象を分かつもの、そこにこそ、芸術作品の意味作用の特異性がある。本論では、実存と芸術とのかかわりを念頭において、バシュラール等の論を援用しながら芸術特有の意味作用の解明を図る。